

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第47回 第11.1.5節～第11.1.8節

2019年12月1日

小田 勝

「11.1.5 場所名詞・方向名詞」の続きから。315頁の「-がり」について。名詞に方向の意を付加する「…^{かた}方」「-さま（後に「-さま」とも）」は、「我が方へ往にけり。」（源・末摘花）、「いづ方へかまかりぬる。」（源・若紫）、「初瀬さまにおもむく」（蜻蛉）、「京さまへなむ来ぬる」（更級）のように、移動動詞に対して助詞「へ」「に」を必要とするが、「-がり」はそのままで（「に」「へ」を必要とせずに）用いられるところに特殊性がある。

用例(7)～(11)の類例、

- ・「文は大輔がりやれ」とのたまふ。（源・浮舟）

用例(12)～(14)の類例をあげる。

- ・思ひをば松の緑に染めしかど花のがりのみ行く心かな（躬恒集）
- ・歌など詠みかはして、同じがり（＝同じ人ノ許ニ）〔歌ヲ〕やれる宰相を（大斎院前の御集・詞書）

「-がり来」の例もある。

・ひさかたの天の川瀬に船浮けて今夜か君が我ががり来まさむ〔我許来益武〕（万1519）
「-がり」と同様「に」「へ」を必要とせずに用いられる方向名詞に「こち」「いづち」があり、第12.15節399頁の最初の◆で説明されているが、こちらで扱うべきであった。次のような用法にも注意。

- ・世の中を思へばなべて散る花の我が身をさてもいづちかもせむ（新古今1471）

同頁「11.1.6 情報名詞」では、類例を追加する。

- ・かばかり思ひそしぬべき身（＝気ヲ遣イスギルハズノ私）を、「いといたうも上衆めくかな」と言ひける人を聞きて（紫式部集・詞書）
- ・何事も昔を聞くはなさけありてゆゑあるさまに偲ばるるかな（山家集）
- ・今もまた昔を書けば増鏡ふりぬる代々の跡にかさねん（増鏡）

316頁「11.1.7 動作性名詞」の、「-す」形の例を追加する。

- ・それ名し給ふ（＝署名ナサル）。「中納言従三位兼左衛門督藤原朝臣正仲」と書き付

け給ふ。(うつほ・内侍のかみ)

- ・源信はさらに名僧せむ心無く(今昔 15-39)
- ・大きな骨、喉に立てて、「ゑうゑう」と言ひけるほどに、とみに出でざりければ、苦痛して遂に死に侍り。(宇治 13-8)
- ・長能は、蜻蛉の日記したる人の兄(古本説話集 26)

動作性名詞は、名詞だけで連用修飾語を受けることがある。

- ・行くと来と雲路を馴らす雁がねは常に旅とは思はざらなむ(恵慶集)

「-す」の形をもつ名詞は「動名詞」などと呼ばれることがあるが、本書ではこれを「動作性名詞」と仮称した。本節の4行目に「現代語では、…動作性をもたない名詞は「-する」の形が成立しない。」と書いたが、「相違する」などが可能であるから、この説明は不適切であった。古典語でも、上例第3例(『宇治拾遺物語』)の「苦痛す」や、

- ・水に映る影は梢を逆さまにして相違せり。(海道記)

の例がある。やはり「動名詞」の名称の方が適切だったか。

同頁「11.1.8 転成名詞」。現代語の「遊び・働き・休み・悩み」のような、動詞の連用形から転成した名詞で、「居体言」ともいわれる。現代語の次のような語は、動詞との関連が浮かびにくいだろう。

はさみ(挟む)・ねじ(振る)・網(編む)・バネ(跳ねる)・帯(帯びる)。

次のような例は、現代語では用いられない。

- ・雷の光のごとき(=短命ノ)これの身は死にの大王常に偶へり畏づべからずや(仏足石歌)
- ・横さまの死にをすべき者にこそはあめれ。(源・手習)

次のような例は、助動詞「ず」を伴って転成名詞になったものといえようか。

- ・上手は、目利かずに心に相叶ふこと難し。下手は、自利きの眼に合ふことなし。(風姿花伝)

用例(1)～(3)の類例をあげる。

- ・徒歩より歩みたへがたくて、寄り臥したるに(源・玉鬘)

[出典追加] 風姿花伝①世阿弥(1363/64-?) ②1400-02年③岩波文庫